

本の学習になかなかついていけない場合もあるし、いじめなどの深刻な問題もありました。ますます増加する帰国子女の受け入れをどうするかは大きな問題となり、「帰国子女教育研究協力校」や「帰国子女受け入れ推進地域」の制度が作られました。私も、現場の教師の立場で、横浜市の受け入れ推進の仕事に携わりました。私たちは、帰国子女をしっかりと受け入れられるようにするためには、学校がより柔軟になり、みんながより広い目で物事を見るようにならなければならないことから、この問題に取り組むことが、日本の学校をよりよく変えて行くことにつながるのではないかと期待を持ちました。

しかし、変わったのは、学校ではなく、帰国する子どもたちの方でした。日本人学校や補習校が整備され、海外で日本の内容を学習する機会が増えたこともあり、さらに、「帰国するといじめられる」という情報が広まり、帰国する子どもたちが、あらかじめ、どうすればいじめられないかを学習してくるようになったのです。新しい環境に備えて準備をすることは決して悪いことではありませんが、「いじめられない方法」として教えられるものの中には、「英語の本は日本風の発音で読むこと」「外国の話をしないうこと」などという、私たちから見れば残念なものもありました。



啓明学園 初等学校
東京都昭島市拝島町 5-11-15
代表： 042-541-1003
国際教育センター： 042-546-5881
<http://www.keimei.ac.jp/>

再び、海外へ

1992年に、私はアメリカへ渡りました。カリフォルニアで短期間学習塾の仕事をした後、バージニア州のフェアファックス・カウンティの小学校で、「日本語イマージョン・プログラム」の教師としてアメリカの子どもたちを教えました。このプログラムについては、いつかあらためてお話ししたいと思います。同時に、ワシントンDCの補習校でも教鞭をとり、ハンブルクのときと同じように、がんばる子どもたち、先生たちと出会いました。二人の子どものうち、高校を卒業していた姉は一年で帰国して進学、弟は七年生からハイスクール卒業までをバージニアで過ごし、親の元を離れて日本の大学へ進みました。

再び、帰国子女と

2001年、東京の啓明学園で、再び帰国子女を受け入れる立場に立つことになりました。小学校だけでも毎年二十数名が海外から編入してくる学校なので、たくさんの帰国生との出会いがあります。彼らはやはり、多くの日本の子どもたちにはないいいものを持っています。それは、海外での生活の中で、時にはとても苦しい思いをしながら培って来たものです。これを大切に育てていくことができる環境を、保護者や関係者の方々と力を合わせて、できるだけ広く作っていきたいと思います。その道を探っていくことは、混乱の中にある日本の学校教育に一すじの光をもたらすことにつながるかもしれません。

海外に住んでいるみなさんともしっかりと協力していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

ひと言

佐々先生の渡米以来の活躍を拝見してきました。海外子女・帰国子女、さらには現地の子供たちを直接指導された経験は非常に貴重です。

その経験豊富な先生が、様々な見方や意見を海外の保護者に発信するコーナーです。ご期待下さい。私も参加させていただきます。

松本輝彦